生島治郎

去年、1937年の上海事変の名残りで、街中はまだ市街戦の傷痕が生々しく残っている。ビルは崩れ、家屋は焼かれ、道路のあちこちには砲弾の破片や銃弾の薬莢が散らばっている。日本人をはじめ、多くの租界中の外国人が戦乱を避けて上海から逃げ出したが、おれは租国がないのも同然だから、日本には帰らなかった。帰ると、前歴についていろいろとうるさく詮索されなければならないので厄介だと思ったからである。

A Private Detective in Shanghai—1938

Jiro Ikushima

上海無宿

中央公論社

上海無宿

A Private Detective in Shanghai
——1938
Jiro Ikushima

生島治郎

中央公論社

上海無宿

一九九四年一二月二五日　初版印刷
一九九五年　一　月一〇日　初版発行

著　者　生島治郎
発行者　嶋中行雄
印刷所　大日本印刷
製本所　大日本印刷
発行所　中央公論社
〒104　東京都中央区京橋二-八-七
振替　〇〇一二〇-四-三四

©1995　検印廃止
Printed in Japan

ISBN4-12-002395-8

目次

上海無宿　5
仇敵　49
女を賭ける　85
歯痛と決闘　129
暴発　175
阿片吸飲者（オピウム・イーター）　219

装幀　亀海昌次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

上海無宿

上海無宿

厚手の下着、ズボン下の上にネルのパジャマを着、セーターを重ね、さらにガウンを着こんでいるにもかかわらず、朝の寒気のきびしさに眼が覚めた。

時計を見ると、午前七時を過ぎたばかりである。いつもの起床時間より二時間ばかり早いが、この寒さですっかり眠気を失っているのを思い知り、ベッドからよろよろと起き上がった。

窓際へ行き、カーテンを開けると、通りの向う側にある蘇州河の水の色が凍ったように鈍く光っていた。この寒さでは、実際に凍っているのかもしれない。

部屋の中もシンと凍りついたような寒さで、おれは思わず両手をこすり合わせた。上海にはときどきこんなとてつもない寒気が襲ってくる。

今朝もおそらく零下三度は下まわっているにちがいないが、部屋の中の暖房はチリッとも音を立てなかった。部屋代を払っていないので、因業な大家の周英成（チョウインチョン）が暖房を停めてしまったのだ。

キッチンへ入り、ガスをひねってみたら、ガスはまだ停められていなかった。そのガスの炎で、取りあえず手をあぶり、それからコーヒーを淹（い）れることにした。

しかし、コーヒーの缶を開けてみると、もうひとつまみほどしか残っていない。これではうす

いアメリカンにしかなるまいと思ったが、ないよりましだ。パーコレーターに水とコーヒーをぶちこみ、そのまま煮立たせることにした。

コーヒーが煮立つ間、朝の一服をした。おれの好みの煙草はゲルベゾルテだが、今は金がないので中国煙草の前門（チェンメン）で我慢をすることにしている。

煙草を吸いながら、ふと思いつき、居間兼寝室にもどった。そこのテーブルの上に、昨夜呑んだジンの壜（ビン）が置いてあった。ジンと称しているが、アルコールになにか得体の知れないものを混ぜた強い安酒というにすぎない。そんなものを呑みつづければ胃が焼けただれるのはわかり切っているので、ふつうは手を出さないが、今のふところ事情ではやむを得ず、路上の闇酒売りから買い求めた代物だった。

しかし、その壜もほとんど呑み尽くして、底の方にちょっぴり残っているだけだった。とは言え、ガソリンがわりに車でも動かせそうな度の強い代物だから、身体を暖めるにはいくらか役に立つにはちがいない。おれは壜を持ってキッチンへ戻り、厚手のコーヒー・カップの中へありったけ注いだ。その頃には、コーヒーも煮立ってきたので、それをカップに入れ、ブラックのまま口に運んだ。

唇が焼けるほど熱いコーヒーが胃の中へ下ってゆくにつれて、身体が暖まってきた。あとはその暖さをジンが身体の隅々まで伝えてくれるだろう。

コーヒーを呑み、煙草をふかしながら、どうしようかと考えた。どうしようと考えたって、今日も仕事のあてはなさそうである。仕事のあてはこの二週間ほど全くなく、おかげでおれのふと

ころは干上がってしまった。
ま、仕事のあてはないが、私立探偵の看板を出している以上、いついかなるときにカモが舞いこんでくるかもしれない。そういう場合、あまり身だしなみが悪いと、カモは信用せず、依頼もしないうちから飛び去ってしまう。
だから、髭を剃り、顔を洗い、歯も磨いて、きちんと服を着こむ必要はあったが、暖房が停っているとなると、当然湯は出ない。冷たい水で顔を洗うのは面倒だなと思った。どうせ、この時間に依頼客が飛びこんでくるはずはない。
腹は減っているが、キッチンの中にろくな食いものはないのがわかっていた。表まで行けば、早朝から働く苦力(クーリー)たちの朝飯用の屋台が並んでいるはずだった。
そこでは熱々(あつあつ)の大餅(ダーピン)やら、饅頭(マントウ)、餅米でつくった握り飯などを売っている。安くてうまい。そのことを思い出すだけで、口に唾が湧いてきたが、表へ出るのが億劫だった。
そうこうしているうちに、妙に部屋の中が暖かくなってきた。ガウンを着ていると暑い。どうやら暖房が入ってきたらしい。暖房がチリチリンと音を立て、スチームの通っている気配がする。
暖房のところへ行き、手を当ててみると、果して暖かかった。
(奇跡が起ったな)
と思った。
(周のやつ、仏心を出したか)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

とも思ったが、あの因業な男がそんな仏心など起すはずはないと思い直した。多分、暖房の操作を使用人が間ちがえたのだろう。

そのとき、電話が鳴った。

この上海では、電話を取ったときの応答がむずかしい。ふつうは上海語だが、おれは日本人なので、日本人からかかってくることも多い。その他の国の人間が相手の場合には、たいてい英語で事が足りることになっている。だから、おれは日本語と上海語、英語を日常的にこなし、怪しげな北京語とフランス語をあやつることができる。

「ハロー」

とまず、英語でやってみた。

「ジス・イズ・ハヤシ・スピーキング」

すると、きれいな日本語が受話器から伝わってきた。

「もしもし、ディテクティブの林愁介(しゅうすけ)さんですね。こちらはある人の代理人で、華秀琴(ホワシウチン)と申します」

華秀琴というからには中国人だろうか、それにしては訛(なま)りのない見事な日本語を話すものだと感心しながら、おれも日本語に切り換えた。

「さよう、わたしが林です。ディテクティブと言っても、刑事じゃありませんよ。以前は工部局で警察の仕事をしたこともありますが、もう辞めて、今は自分でやっているんです。プライベイト・ディテクティブですよ」

「知っていますわ。あなたのことはかなり調べさせていただきました」
美しい透明な声ではあったが、それだけに冷やかで乾き切っていた。
「それで、うちのボスがあなたにお願いしたいことがあるらしいんですが、今日の午前九時までにおいでいただけないでしょうか」
「なんですって?」
おれは、かなりむっときた。
まず第一に、おれのことを勝手に調べたと言い切っていることが気に入らなかった。次に、いつでもおれがどこへでもすっ飛んで行くような安っぽい男と踏んでいるらしいことだ。
「おたくのボスって、いったい何者なんです?」
と思わず、ぶっきら棒な口調になった。
「得体の知れない人間の依頼は引き受けないことにしているんですがね」
「そんなぜいたくなこと、言っていられるご身分かしら?」
と皮肉っぽい声が返ってきた。
「あたしはあなたのことを、調べたと申し上げたはずですわ。ということはあなたの現在の経済状態も知っているということですのよ。あなたはこの二週間全く仕事をしていない。従って、かなり困った状態になっておられるはずですね」
「そんなことはそっちの知ったことじゃないだろう」
おれはますます不愉快になった。私立探偵稼業が、自分のことをあれこれ調べられたんでは立

つ瀬がない。
「ぼくは自由業ですからね、とやかく指図がましくされるのは嫌いなんだ。そういう性格だから、この稼業を選んだ」
「でも、いくら意地を張っても、暖房もなしでふるえているじゃない」
と華は言った。
「もし、この仕事を断るのなら、寒い思いをしなければなりませんのよ。その暖房を入れるように周大人(たいじん)に頼んだのも、あたしなんですからね」
「わかったよ」
とおれは言わざるを得なかった。
どうやら、敵は大家の周まで知っているらしい。ということは、おれについてのかなりの情報を持っているということである。そこまで調べて、おれになにか頼みごとがあるというからには、よほどの事情あってのことだろう。
その事情を知りたいという好奇心がうずいた。それに、自分のことをどうやって調べたかも知っておかねばならない。
「九時にどこへ行けばいいんですかね?」
「八時三十分に、迎えの車を出します」
と女は言った。
「その車に乗っていただければ、運転手が邸(やしき)まで案内しますわ」

上海では殺人、強盗、誘拐は日常茶飯事である。得体の知れない連中の言いなりになるのはきわめて危険である。

しかし、現在のおれの状況では、暖房が停るほどのふところ具合の方が、よほどリスキイに感じられた。ここから脱することができるなら、身の危険はかまっていられない。

「いいだろう」

とおれは言った。

「では、八時半に」

電話を切ってから、洗面をすませ、髭を剃り、歯も磨いた。ツイードの上着に、フラノのズボンをはき、きちんとネクタイもしめた。第一級とは言いがたいが、一応、紳士の身なりを整えたわけである。

そのなりで、階下へ降りた。一階の南部屋に大家の周が住んでいる。ノックをすると、周自身が顔を出した。

つるつるに頭の禿げ上がった、五十半ばのでっぷり肥った男である。顔にはアバタの跡が残っている。眉はうすく、眼は小さく、鼻は平らで口が大きい。いかにも人の好さそうな人相に見えるが、これが仲々油断のならない男なのである。

「やあ、林先生（リン・シーサン）」

と言って、やつはニコッと笑った。暖房を停めた非情さはカケラも見えない愛想の良さである。

「ウェイ・チョクワ?」

『ウェイ・チョクワ』というのは、上海語で飯を食ったかという意味である。それがはじめてその日会ったときの挨拶になっている。この上海には、それこそその日の食にありつけない人間がごまんといるから、飯が食えるだけでも幸せなのである。

で、飯を食ったかどうかが、相手の機嫌が良いかどうかの規準になる。『ご機嫌いかがですか?』と訊いているようなものだから、『食べました』すなわち、『チョク』と答えれば、『おかげさまで』というような意味になる。

しかし、おれは『チョク』とは答えなかった。事実、まだ飯は食っていない。

「まだだぜ(ンメ・チョク)」

と答えて、ぐいと扉を押し開け、中へ入った。そこは十坪ほどもあろうかという広い部屋だったが、いろんな家財道具が置いてあるので、使えるスペースは三坪ほどに過ぎず、そこが周の主な居住空間になっていた。

金に困っている連中から、あらゆる家財道具を取り上げ、ここへしまいこんでいるので、自分の住むところがせまくなったのだ。いわば、ここは倉庫がわりなのである。

おれは紫檀のテーブルに紫檀の椅子という、これもどこかから差し押えたにちがいない食卓セットの一角にどっかと腰を下ろした。

「教えてもらおうか」

煙草を取り出しながら、じろっと周を見やった。

「おれの部屋の暖房を入れてくれた人物の名前だがね」
「わたしは知りませんよ」
周は大仰に両手を広げてみせた。
「電話で、林先生の面倒を見てやってくれれば、それ相応のお礼をすると言われただけでしてね」
「電話で?」
おれはニヤッとした。
「そいつはあんたの主義に反するだろう。電話だけで、そんなことをしていたら、ここにこんなに家財道具の集るわけがない。あんたの信用しているのは現金か物だけだ。ということは、電話ばかりでなく、現金で頼まれたからこそ、あんたはおれの部屋に暖房を入れたということになる。かくすなよ。誰にいくらで頼まれたんだ?」
「困ったな」
周は溜息を吐いた。
「じゃあ、正直に言いますが、昨日ある男がわたしを訪ねてきて、百元渡したんです。これで、あんたの面倒を見ろと言ってね。今朝の七時半から暖房も入れろということでしたね。つまり、一ヵ月分の家賃として、この金を受け取れというわけです。だから、わたしはそのとおりにした。こっちにとって、損する話じゃないからね」
「その男はどういう男だった?」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com